

東秀吉著 『球磨弁助詞と助動詞と』 『球磨弁音韻と
文法』 『球磨弁語彙と語法』

迫野, 虔徳
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12007>

出版情報 : 語文研究. 59, pp.64-65, 1985-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

《紹介》

東秀吉著 『球磨弁助詞と助動詞と』 『球磨弁音韻と文法』

『球磨弁語彙と語法』

迫 野 虔 徳

東秀吉氏の『球磨弁語彙と語法』が昭和五十九年十一月に刊行された。先に出版された『球磨弁助詞と助動詞と』（昭和五十七年十一月）、『球磨弁音韻と文法』（昭和五十八年十一月）とあわせて、これで東氏の球磨地方の方言研究三部作が出そろったことになる。私家版で目にふれることがすくないかと思うので、この機会に紹介させていただきます。

東秀吉氏は、九州大学法文学部国文学科を昭和十五年三月に御卒業。四年間ほど宮崎県立宮崎中学校（現大宮高等学校）に勤務ののち、生れ故郷の熊本県人吉市に帰られ、昭和五十年四月熊本県立人吉高等学校長を最後に退職されるまで、当地でながらく教職にあられた。その間、郷土の言葉に興味をもち、人吉高校在職中は、熊本県高等学校国語研究部会の機関誌「国語研究紀要」7号に「球磨・人吉弁小考 1 助詞」（昭48）、同誌8号に「球磨・人吉弁小考 2 助動詞」（昭49）、10号に「球磨・人吉弁小考 複合語」（昭51）などを発表された。人吉高校退職後、右論考を更に発展させて、昭和五十五年には「球磨・人吉弁小考」原稿本十五卷二十三冊を完成され

たという。昭和五十七年『球磨弁助詞と助動詞と』を手はじめに、毎年一冊のペースで出版されてこられたのには、こうしたながい間の研さんがあってのことであった。

『助詞と助動詞と』『自序』に「生れ、育ち、遊び、途中、就学と職業との為に、東京、福岡、宮崎に都合十年を暮したほかは、五十年この地に住んでいる。この小著は殆んどすべて、筆者の言語生活を内省してまとめたものであって、実地の『調査』によって書いたものは、中球磨弁の一部を含めて、ごく小部分にすぎない」とあるように、右記三著は、きつすいの球磨生活者である著者が、自分の方言を内省して分析記述したものである。著者は、この内省を主とし、他に調査の及ばないことをいくぶん謙退のことばで語られるが、むしろこの点が本書の一つの価値ある特色になっているとみるべきであろう。柴田武氏が「わたしが方言集を作るとしたら」（言語生活 昭和41・1）という文章の中で次のように言っている。「いままでの方言集は、県を単位としたもの、町や村を単位としたものが大部分である。したがって、方言集は複数の個人の言語、しかも、

多少とも広がりを持った地域の言語を代表している。わたしは、理想的にはまず、一個人の言語の記述に徹すべきだと考えている。あるいは、少しゆるくして、最小集落(大字・小字など)の言語としてもいい。わたしの経験では、方言は最小集落ごとに違っている。

まったく同一の方言を持つ最小集落は二つとはない。それは、理論的にも考えつくことである。それを押しつめると、けっきょくは、ある個人の言語しか対象にしえないということになるかもしれない。ことばの個人差は意外に大きいし、方言学はそのことに強い関心を寄せているからである。」本書は、いわゆる方言集ではない。音韻・文法・語彙などの各面から総合的体系的に記述することをめざしたものであるが、事情は同じなはずである。むしろ、より一層右のようなことが要請されるといってもよいかもしくない。幸い、五十数年、ほとんどその土地を離れたことがなく、かつ、冷静に深く自分のことばを内省し得る人を得て、熊本県南部の一人の生活者のことばの記述ができたことをまず喜びたい。本書の価値をまずこの点にみたいのである。

右三著作の構成は、表題からうかがえるように、第二作『音韻と文法』第三作『語彙と語法』の二書で、球磨地方の音韻・文法・語彙の全体をひとまずおさえた形になっている。第一作『助詞と助動詞』は、したがって、特殊研究篇にあたるといえる。

「音韻」は、各種連母音の融合化現象、促音化、撥音化、長・短音化現象などを中心に、「文法」は、動詞・形容詞・代名詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞・接辞に分けて、意味や用法上の問題点について詳述する。第三作『語彙と語法』の「語彙」は、名詞・動詞・形容詞・副詞・複合語に分ち、名詞は意味分類に

より、その他は五十音順に、三百数十語について、意味・用法・語源などを考察する。「語法」は、第二作の「文法」と用語がまぎらわしいが、細目は、1、応待の言葉、2、挨拶の言葉、3、男の言葉・女の言葉となつていようように、言語生活的な実際の場合におけることばの用法を考えたまものである。第一作の『助詞と助動詞』は、先述のように、早く、「国語研究紀要」に助詞・助動詞の研究を發表されているなど、ここに球磨弁の一つの特色をみようとする著者の姿勢を示すもので、特に一書に編んで詳述したものである。球磨地方の助詞・助動詞を、共通語と形も意味も用法も全同のものは除いて、五十音順に示し、それぞれに分類上の位置、接続、活用、語源、働きについて説明を加えて、最後にその語の具体的なつかわれ方を球磨弁による会話例で示している。特に「働き」には、その一、一の語のつかわれ方、意味などについて共通語と比較対照したりして要を得た説明があり、実際の使用者がじっくり内省するということの強みがよく示されているといえる。

熊本県の南部の方言については、これまでに、まとまったものとして、斎藤俊三氏の『熊本県南部方言考』(昭33)があった。水俣市を中心に、八代・芦北両郡の農山漁村を含んでの記述であるが、今回は、これに数倍する詳しさでもって、もうすこし内陸よりの方言の記述がまとまったことになる。相良藩という他と藩を異にしていたという歴史的条件、鹿児島弁地帯とほとんど相接するかのようない熊本県最南端という地理的条件、いずれからしても興味のつきない地方であるだけにこのたびの労作の意味は大きいといわなければならない。(非売品 千88熊本県人吉市西間下町一五七 東秀吉)